

「お前のせいで怒られたらろ」
「バカカ！」
「バカはお前だバカカ！」
「バカって言ったほうがバカなんだって！」
「うっせえバカカ！」
「バカバカバカ！」

「おかあさん」
「なあに」
「寒くない？僕のマフラー貸すよ？」
「大丈夫よ。ありがとう」
「僕は、おかあさんの味方だからね？」
「うん。ありがとう……お家、帰ろっか？」

「猫系いよな」
「ツンデレかわゆす」
「見た目も猫っぽいのがいい。ちよいつり目」
「わかる。穿たら目が細くなると更にイイ」
「わかる。耳が付いていたらもつとイイ」
「それはちよつとマニアックすぎる」

「知らんぷりしすぎ！」
「ごめん」
「ずっと待ってたんだから！」
「すいません」
「ちゃんとして責任とってよね？」
「そのつもり」

少年と小さな少年

少年と母

少年と猫と友達

少年と幼なじみ

「こどもの日だからブレイクイロジャー！」
そう叫びながらオモチャの剣を振り回す
小さなイトコに、僕はハイパーハイドロ
キャン(水鉄砲)で応戦した。すると
お母さんに、大人気ない！と叱られた。
僕まだ小学生だし、パスも子ども料金
なんだけど。

「僕たちはどこから来たの？」
そう聞いた僕に、母は夕闇に光る一番
星を指差した。
「僕たちはどこへ行くの？」
手を繋いだ母の手は、あたたかい。
でも家を出てからずっと泣きそうな顔を
している母に、ずっと何か話しかけて
いないと怖かった。

『まったく、アンタってば、ほんとトロい
んだから！さっさと私に付けてきなさい
よね！』
チラチラ後ろを見ながら僕たちの前を
進む猫にアテレコしていたら、
「お前ってツンデレ委員長系好き？」と
すかさず聞いてきたコイツとは、高校が
違っても友達でいられると確信した。

「だーかーただの友達だつて！」と
強く否定されるほど疑念が湧くよ。
「アンタもただの幼なじみだよ？」と
突きつけられるほど気持ちが悪むよ。
でも彼女が嘘をつく時、可愛い眉が
上がることをわかっていた。
だから知らんぷりして、幼なじみの席に
居座り続けているんだ。

持っている夢を机の上に並べていへ。
「宇宙へ行って宇宙人に会いたい」
ものから、「引き出しの中のチョコが
食べたい」ものまで。
汚れやキズがないか確認して、大きさ
順に並び変えて満足したら、また僕の
心の中にしまこんだ。
さて、チョコ食べよつと。

ドキドキして眠れない夜がある。遠足や
期末テストの前日は、特に。
でも明日はなんでもない日なのに、
今夜もドキドキして眠れない。
今日、友達とケンカしたから？
明日、あの子と同じ日直だから？
寝返りするたび軋むベッドの上で、
108頭目の羊を数える。

少年と夢

少年と眠れない夜

春木
のん
著

少年と

僕は昔、少年だった。
好奇心旺盛で何でも首を突っ込み、
時々、転んでケガもした。
それでも立ち上がって夢を追いかける、
ただの少年だった。
それから少し年をとった僕は、何事にも
保身的で動じることもなくなつた。
僕は、もう少年ではない。

少年と少し年を取った僕

「宇宙行きてー」
「じゃあ勉強しろよ」
「それとこれとは話が別なんだな」
「なんだよそれ」
「宇宙人に会いたかったんだよ」
「さらわれて内臓取られろ」

「なあ。昨日はダメだな」
「うん。俺も」
「今日、学校終わったらピエ？」
「ピエ」
「じゃあ遊ぶか？」
「いいよ。目直の仕事あるから、後でな」

青春謳歌？思春期の坩堝？
素直ときどき天邪鬼な
《少年》のショートストーリー。

幸せや笑いに溢れているとは限らない
日常を切り出した短編小説はコチラから。

chiche-シシユ-

<http://nanos.jp/honnou/page/77/>

Twitter @Hanuki Non 発行 2015年10月下旬